

中小規模私立大学における教学 IR 研修会に関する一考察

— 合同 IR 研修会のアンケート結果を踏まえて —

A Study on the Teaching and Learning IR Seminar in Small and Medium Private Universities: Based on Results from a Collaborative IR Seminar Survey

大須賀元彦・林 勇人

Motohiko Osuka and Hayato Hayashi

要 約

中京学院大学では教学マネジメントの推進に向けて教学 IR に関する研修会を2022年度から他大学との合同で継続的に実施してきた。このような背景から本研究の目的は2023年度に実施された中京学院大学主催の第2回合同 IR 研修会の参加者に対して実施したアンケートを分析することで、参加大学における教学 IR に関する現状と課題、そして教学 IR 研修会の効果及び研修会に求められる役割についての示唆を得ることである。分析の結果、教学 IR 研修会の効果として自大学の教学 IR 組織の理解につながる可能性が示された。また教学 IR 研修会には組織間連携の促進やインナーブランディングの機会をもたらす役割があると考えられた。その一方で、いくつかの参加大学が人的、時間的制約や分析結果に基づく改善策等の実施後の見直しに課題を抱えていることが示唆された。そのためこれらの課題に対して有益な事例報告やコンサルティングを行うことが今後の教学 IR 研修会に求められているといえよう。

キーワード：教学 IR, 中小規模私立大学, 合同 IR 研修会, アンケート

I. はじめに

文部科学省は他大学等への教学 IR (Institutional Research) の普及を私立大学等支援事業の要件とすることで、私立大学に対して教学 IR の機能強化等を促している¹。規模の勝る大規模大学に対して小規模私立大学²ではその特色を活かした教育プログラムの展開を期待される一方、多くの小規模私立大学では教学マネジメントの推進に向けた教学 IR においていくつかの組織的課題を抱えている。例えば、一般社団法人日本私立大学連盟大学 IR 機能促進検討プロジェクトはアンケートの結果に基づき、小規模大学における人的、予算的な課題についても示している (一般社団法人日本私立大学連盟大学 IR 機能促進検討プロジェクト, 2018, p. 16)。

この点に関して大須賀・林・今津は、小規模私立大学である中京学院大学の事例を取り上げ、中京学院大学 IR 室³が教学マネジメントを推進するために IR 室レポートの作成や教職員座談会を実施してきたものの、分析結果の組織的な共有等に課題を抱えていることに言及しつつ、その改善策として他大学との IR 研修会の必要性について指摘した (大須賀・林・今津, 2022, p. 18)。またその必要性に基づき中京学院大学 IR 室は2022年度に中京学院大学主催の合同 IR 研修会を実施したものの、大須賀・富田・今津・林によれば、小規模私立大学に特化した教学 IR 研修会をどのように企画するのが今後の課題であると論じた (大須賀・富田・今津・林, 2023, p. 48)。

しかしながら中小規模私立大学を含めて教学

IR に関する研修会の効果や研修会に求められる役割については十分に研究がなされていない。そこで本研究の目的は2023年度に中京学院大学が主催した「第2回中京学院大学主催合同 IR 研修会」のアンケート結果の分析を通して、中京学院大学と参加大学の回答結果を比較しながら中小規模私立大学における教学 IR に関する現状と課題、教学 IR 研修会の効果及び研修会に求められる役割についての示唆を得ることである。

II. 第2回中京学院大学主催合同 IR 研修会の経緯

中京学院大学は岐阜県瑞浪市と中津川市にキャンパスを抱える東濃地域唯一の私立大学である。瑞浪キャンパスには看護学部と短期大学部があり、中津川キャンパスは経営学部を有しており、定員収容数が4000人未満の小規模私立大学である⁴。

上述した教学 IR 研修会の必要性から2022年度には第1回となる「中京学院大学主催合同 IR 研修会」を実施した⁵。大須賀・富田・今津・林は研修会の総括として「中長期的な視点に立脚した継続的な IR の実施」、「組織間連携の促進」、「データの管理と活用の工夫」、「建学の精神に基づいた情報発信の実現」の4つの知見に言及した(大須賀・富田・今津・林, 2023, pp. 44-45)。

このような背景から、参加大学に教学 IR を普及するという目的に加え、4つの知見に関する参加大学の現状と課題や、上述した教学 IR 研修会の効果及び研修会に求められる役割を探究するために「第2回中京学院大学主催合同 IR 研修会」を実施した。

III. 第2回中京学院大学主催合同 IR 研修会の概要

「第2回中京学院大学主催合同 IR 研修会」は2023年9月1日(金)にオンラインで開催され、第1回よりも参加大学数を増やし実施された。第1回と同様に事前準備の段階から教学 IR 実務担当者らによる打ち合わせが催されると共に、オンラインでの実施ということもあり、研修会中に画面共有やマイク等に不具合が生じないよう研修会開始前にそれらのテストが行われた。

研修会のプログラムは第一に事例報告、第二にコンサルティング、第三にミニシンポジウムから構成された。事例報告とコンサルティングは参加大学の教学 IR 実務担当者が行い、ミニシンポジウムは中京学院大学の教職員によって実施された。なおミニシンポジウムに関しては2つのテーマが設けられた。その1つ目は第1回の研修会からの知見の1つである「建学の精神に基づいた情報発信の実現」に関連し、「建学の精神の具現化につながる教学 IR」をテーマとした。もう1つのテーマは「組織間連携の促進」と「データの管理と活用の工夫」に関連させる形で「現場レベルの教学 IR の活用の在り方」とし、参加者は必要に応じてそれぞれのテーマを視聴した。研修会終了時等に後述するアンケートの案内が行われた。後日、研修会の録画動画が参加大学に送付され、第1回に引き続き参加大学において研修会の振り返りが可能となった⁶。

IV. アンケートの概要と IR 研修会の役割

参加大学の教学 IR の現状や課題の把握及び今回の IR 研修会の企画の示唆等を得るために研修会後に参加者に対して「第2回中京学院大学主催合同 IR 研修会アンケートのお願い」を実施した。アンケートは Microsoft Forms による無記名式で行い、有効回答数は53件⁷であった。アンケートの質問項目は表1の通りである。なお本アンケートは調査実施前に中京学院大学研究倫理審査委員会による承認を得ている(承認番号:23-04)。

以下では本研究の目的の1つである研修会の効果及び研修会に求められる役割に関連する質問項目である No.6から No.12に対する集計結果を示し、その結果に対して考察をしていく。

図1は「今回の研修会を通して自大学の IR 組織の取り組みを以前より理解することができましたか。」に対する回答結果である。回答の選択肢には「はい」、「いいえ」、「わからない」があり、全回答者数の中、96%(51名)が「はい」と選択しており、「わからない」が4%(2名)、「いいえ」の回答者はいなかった。この結果から IR

研修会の効果の1つとして研修会が自大学のIR組織の理解につながる可能性が示された。

自大学のIR組織の理解の深化は組織間連携の促進やインナーブランディングの機会につながると考えられることから、大学の規模を問わず教学マネジメントの推進に寄与する可能性がある。

V. アンケートの結果から見る4つの知見

次に図2は4つの知見に関連する質問項目である「自大学のIR組織において「中長期的な視点に立脚した継続的なIRの実施」が出来ていると思いますか.」、 「自大学のIR組織において「組織間連携の促進」が出来ていると思いますか.」、 「自大学のIR組織において「データの管理と活

表1. 「第2回中京学院大学主催合同IR研修会アンケートのお願い」の質問項目

No.	質問項目
1	全体的な研修会のプログラムの内容はいかがでしたか。
2	全体的な研修会の時間配分はいかがでしたか。
3	ミニシンポジウムはいかがでしたか。
4	中京学院大学教学IR室の事例報告は参考になるものでしたか。
5	各参加校のコンサルティングセッションは参考になるものでしたか。
6	今回の研修会を通して自大学のIR組織の取り組みを以前より理解することができましたか。
7	自大学のIR組織において「中長期的な視点に立脚した継続的なIRの実施」が出来ていると思いますか。
8	自大学のIR組織において「組織間連携の促進」が出来ていると思いますか。
9	自大学のIR組織において「データの管理と活用の工夫」が出来ていると思いますか。
10	自大学のIR組織において「建学の精神に基づいた情報発信の実現」が出来ていると思いますか。
11	自大学あるいは自組織が抱える教学IRに関する課題に該当するものをすべて選んでください（複数選択可）。
12	今後の研修会で取り上げてほしい取り組みをすべて教えてください（複数選択可）。
13	ご意見等がございましたらご自由にお書きください（任意回答）。
14	ご所属をお答えください。
15	職種をお答えください。

注：筆者作成

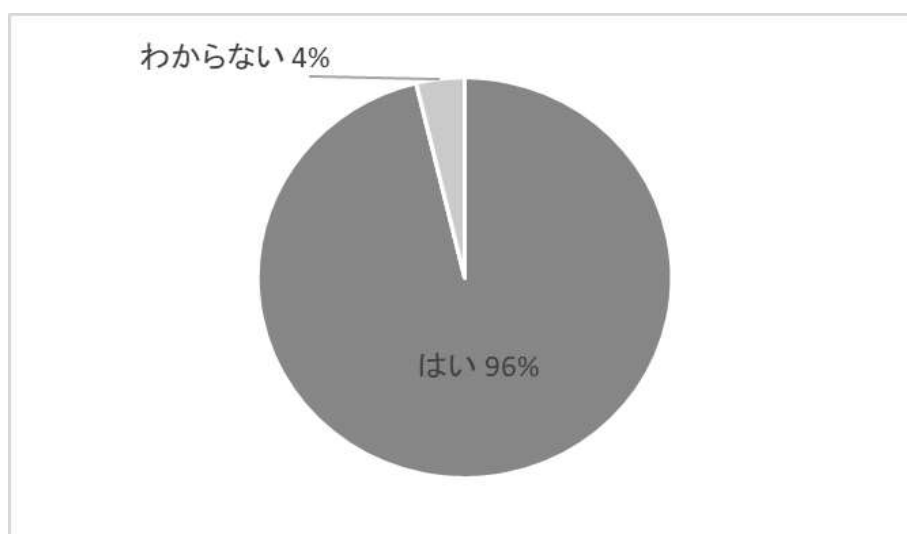


図1. 「今回の研修会を通して自大学のIR組織の取り組みを以前より理解することができましたか.」に対する回答結果

注：回答数 = 53件. 筆者作成

用の工夫」が出来ていると思いますか.」,「自大学の IR 組織において「建学の精神に基づいた情報発信の実現」が出来ていると思いますか.」, に対するすべての参加大学の回答結果である。

各回答項目すべてで最も回答割合が高かったのが「3」であり, 次いで「4」の評価が多かった。各項目の「3」を除いて「1」と「2」の合算割合(否定的意見の割合)と「4」と「5」の合算割合(肯定的意見の割合)を比較したところ, 「4」と「5」の合算割合はすべての項目で上回っていた。なお最も「4」と「5」の合算割合が高かったのは「自大学の IR 組織において「中長期的な視点に立脚した継続的な IR の実施」が出来ていると思いますか.」で, 最も「1」と「2」

の合算割合が高かったのが「自大学の IR 組織において「建学の精神に基づいた情報発信の実現」が出来ていると思いますか.」であった。

上記の結果から参加大学全体としては, どの項目も「3」の評価が最も多く, それ以外に関しては「4」と「5」の合算割合が「1」と「2」の合算割合よりも高かったものの, 肯定的意見と否定的意見が混在していることが明らかとなった。

次に図 3 は中京学院大学のそれら 4 つの知見の現状と課題を探るために中京学院大学以外の参加大学との比較を行い, その回答結果をまとめたものである。

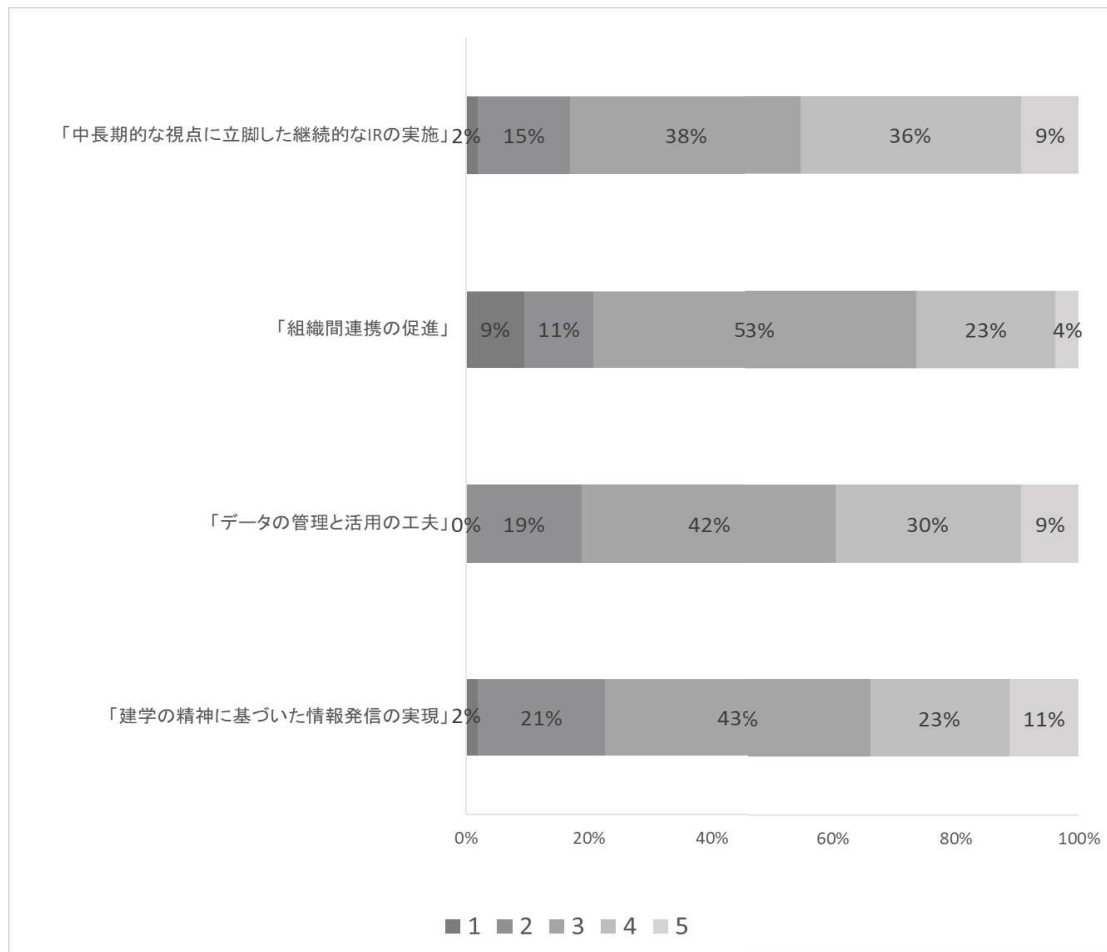


図 2. 4 つの知見に関する回答結果 (参加大学: 短期大学, 短期大学部を含む 9 校)

注: 評価基準として 1 を「まったく出来ていない」, 5 を「とても出来ている」とし, 1 から 5 の数値の選択を求めた。回答数 = 53 件。筆者作成

「自大学の IR 組織において「中長期的な視点に立脚した継続的な IR の実施」が出来ていると思いますか。」に関して、中京学院大学で最も回答割合が高かったのが「4」の評価で、参加大学は「3」であった。

「自大学の IR 組織において「組織間連携の促進」が出来ていると思いますか。」に関して、中京学院大学及び参加大学で最も回答割合が高かったのが共通して「3」の評価であった。しかし、次に回答割合が高かった評価は中京学院大学の場合、「1」で、参加大学の場合、「4」であり、回答傾向に相違が見られた。

「自大学の IR 組織において「データの管理と活用の工夫」が出来ていると思いますか。」に関して、中京学院大学で最も回答割合が高かったのが「3」の評価で、参加大学は「4」であった。また「まったく出来ていない」に該当する「1」の評価については共通して存在しなかった。

最後に「自大学の IR 組織において「建学の精神に基づいた情報発信の実現」が出来ていると思いますか。」に関して、中京学院大学及び参加大学で最も回答割合が高かったのが共通して「3」の評価であった。しかし、次に回答割合が高かった評価は中京学院大学の場合、「4」と「5」で（同率）、参加大学の場合、「2」と「4」であった（同率）。

ここまでアンケートの結果から4つの知見に関する現状を中京学院大学とそれ以外の参加大学の回答に分けて分析してきた。中京学院大学のみで見た場合、「中長期的な視点に立脚した継続的な IR の実施」と「建学の精神に基づいた情報発信の実現」に関しては集計結果から肯定的意見が否定的意見を上回っていた。この要因に関しては中京学院大学では、学内の FD・SD 研修会等で建学の精神の理解や中長期的な教育改善計画について言及する機会が設けられてきたため、これらの数値が高くなった可能性がある。

その一方で、中京学院大学の「組織間連携の促進」と「データの管理と活用の工夫」に関しては集計結果から参加大学の数値と比較して否定的な回答割合が多く、組織的に課題があることが示唆された。この点について、教学 IR 室から学内に対して組織間連携やデータの管理等についての問題点がたびたび課題として共有されており、そのことが学内の認識に反映された結果と考えられる⁸。

VI. アンケートの結果から見る教学 IR の課題

図4は「自大学あるいは自組織が抱える教学 IR に関する課題に該当するものをすべて選んでください（複数選択可）。」に対する回答を示している。人的、予算的、時間的の3つの制約の中で

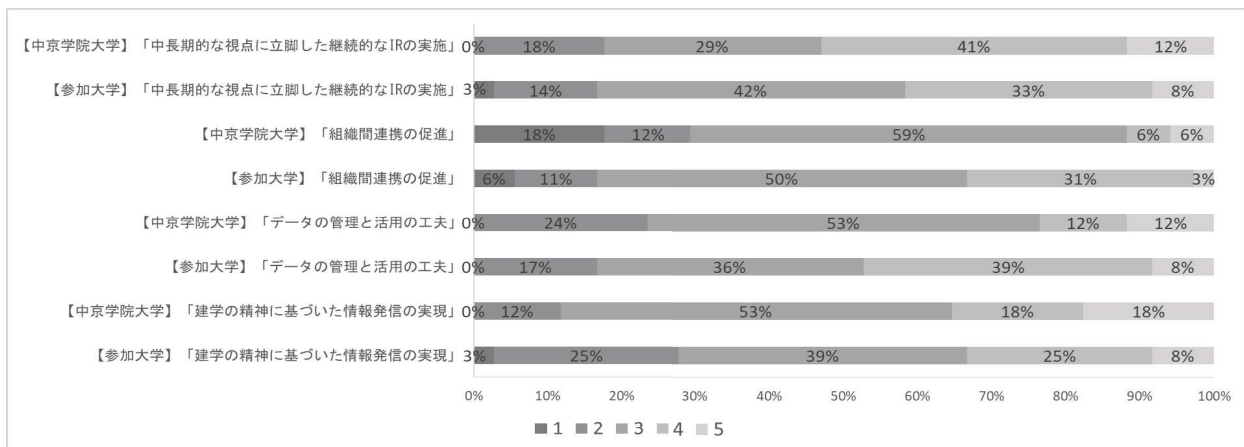


図3. 中京学院大学と参加大学（中京学院大学除く）の4つの知見に関する回答結果

注：評価基準として1を「まったく出来ていない」、5を「とても出来ている」とし、1から5の数値の選択を求めた。中京学院大学回答数 = 17件、参加大学回答数（中京学院大学除く） = 36件。筆者作成

は人的制約の回答数が最も多く（24件）、次いで時間的制約（22件）、そして予算的制約（12件）と続いている。これは参加大学の多くが小規模私立大学であり、業務の兼任に伴う現状を反映した結果と考えられる。「インナーブランディング」（13件）や「分析手法」（12件）、「学内の教学 IR 研修（FD・SD を含む）」（11件）も課題として挙げられているが、他の項目に比べ相対的に回答数は少なかった。

次に教学 IR による分析結果に基づく PDCA に関する問いに対して本研究では PDCA を「分析結果に基づく改善策等の立案（Plan）」、「分析結果に基づく改善策等の実施（Do）」、「分析結果に基づく改善策等の実施後の評価（Check）」、「分析結果に基づく改善等の実施後の見直し（Action）」と定義した。集計結果から PDCA については「P」に該当する回答数が最も少なかった（19件）。最も多かった回答は「A」に該当する項目であった（26件）。このことから、「改善策等の立案」よりも「改善策等の実施後の見直し」をすることの難しさが示唆された。

最後に図 5 は「今後の研修会で取り上げてほしい

取り組みをすべて教えてください（複数選択可）」に対する回答結果をまとめたものである。最も回答が多かったのが事例報告であった（37件）。これは参加大学の実践的な取り組みを知る機会であることから要望が高くなったと考えられる。次いで多かったのはコンサルティングセッションである（27件）。コンサルティングセッションは参加大学間でそれぞれの教学 IR に関する課題に対して助言や指導等を行う機会である。自大学にはない課題の解決策の提示や直接教学 IR 実務担当者間でのコミュニケーションが生まれるため、研修会の中でも双方向性を感じさせる内容であることが回答に影響したと考えられる⁹。

対面による交流会に関しても 10 件の回答数があった。これまでに実施してきた 2 回の研修会はいずれもオンライン開催であり、事前の打ち合わせを含めて対面で交流できるような機会が求められていると考えられる。

VII. 今後の研修会に向けて

ここまで「第 2 回中京学院大学主催合同 IR 研修会」のアンケート結果を通して参加大学の現状

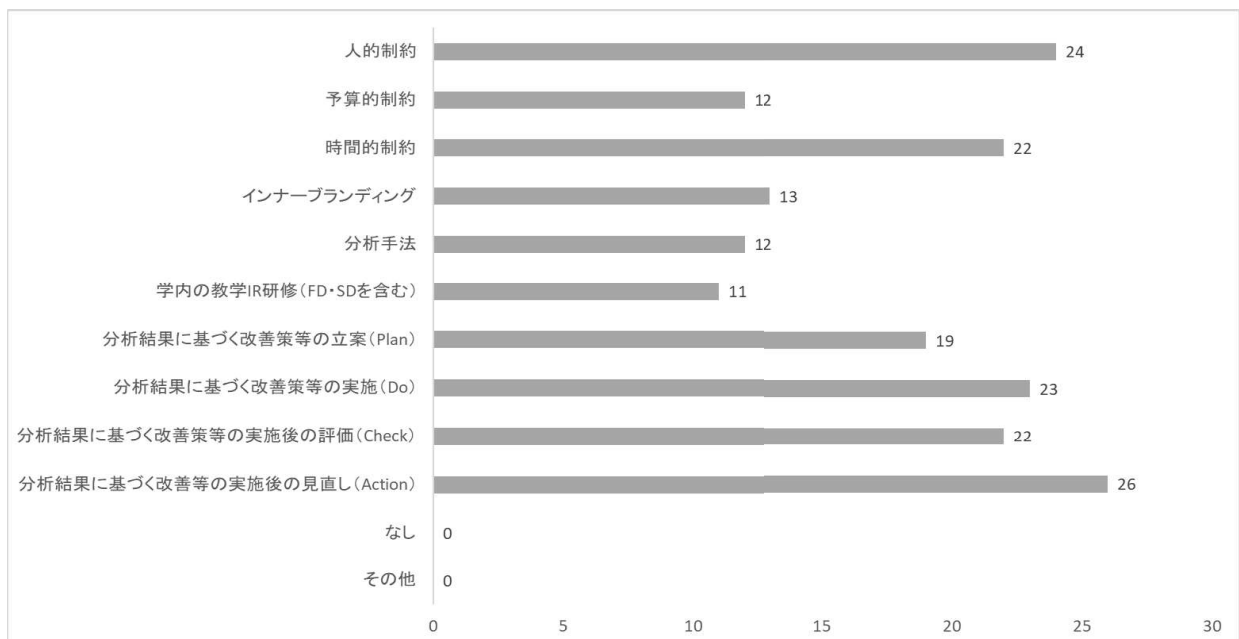


図 4. 自大学あるいは自組織が抱える教学 IR に関する課題（複数選択可）

注：回答数 = 53 件。筆者作成

や課題，そして教学 IR 研修会の効果とその役割について論じてきた。教学 IR 研修会の効果として自大学の教学 IR 組織の理解につながる可能性が示された。また教学 IR 研修会には研修会の実施を通して学内での教学 IR 組織の理解が深まることで，組織間連携の促進やインナーブランディングの機会をもたらす役割があると考えられた。さらにいくつかの参加大学が「人的制約，時間的制約」の中でいかに効率的に教学マネジメントの推進に向けて業務を遂行していくのかや，「分析結果に基づく改善等の実施後の見直し」を課題として捉えていることが明らかとなった。

以上のことから今後の研修会での実施の要望が多かった「事例報告」及び「コンサルティング」をより一層活用しつつ，上述された課題について教学 IR 実務担当者らが議論を深めることができる対面での交流を含む研修会を構築していく必要がある。

その一方で，今回のアンケートでは参加大学の回答者数にバラつきがあることから，回答結果がその大学の意見を十分に反映していない可能性が

あり，中小規模私立大学の教学 IR の現状や課題，教学 IR 研修会の効果とその役割のすべてを捉えきれないと考えられる。そのため今後は参加大学数そのものを増やしていくことに加え，アンケートの回答数自体を増やすこと等も研究課題である。

VIII. 謝辞

「第2回中京学院大学主催合同 IR 研修会」の実施に際して参加大学の教学 IR 実務担当者様をはじめ多くの教職員の皆様のご協力を頂きました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また中京学院大学教学 IR 室の今津木綿子様，水野沙綾先生，短期大学部の富田宏先生には本研究に際して大変有益なアドバイスを頂きました。改めてお礼申し上げます。なお本研究に関する誤りは筆者に責任がありますことをここに記します。

注

- 1 各年度の詳しい IR に関する要件は文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」を参照のこと。

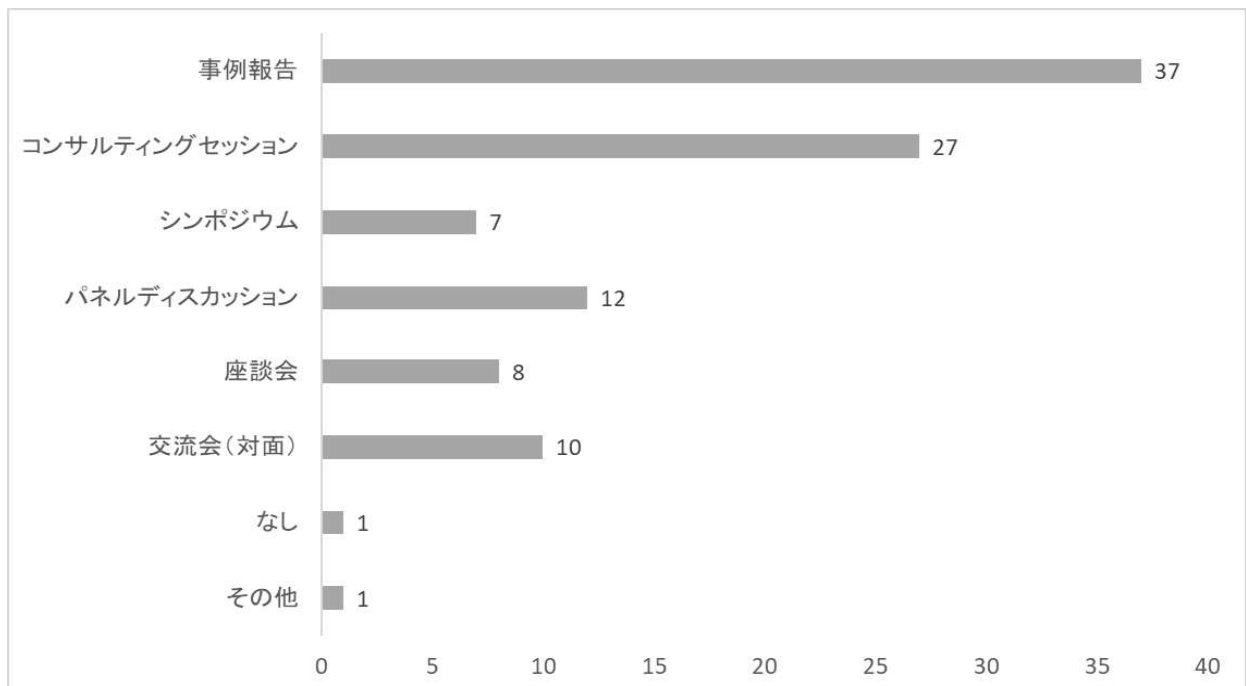


図5. 今後の研修会で取り上げてほしい取り組み（複数選択可）

注：回答数 = 53件. 筆者作成

- 2 日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター私学情報室（2023）によれば、収容定員が4000人未満を小規模大学、4000人以上から8000人未満を中規模大学、8000人以上を大規模大学とされていることから本研究でもその分類に従う。
- 3 中京学院大学 IR 室は2023年度より教学 IR に特化した業務を行うために「教学 IR 室」と名称を変更した。
- 4 詳しい収容人数等は中京学院大学「収容定員、在籍者数」を参照のこと。
- 5 第1回の研修会の詳細は中京学院大学「IR の取り組み」を参照のこと。
- 6 第2回の研修会の詳細は中京学院大学「IR の取り組み」を参照のこと。
- 7 本研修会はオンラインによる事前申し込み制で実施したが、1つのアカウントに対して部署単位の視聴も可能とした。そのため、実際何名が視聴したのかがオンライン上での視聴者数からでは確認できず、アンケートの回収率を算出できなかった。なお、参考値として参加ログ上のデータに関して名前や部署の重複を1名とカウントし、接続時間が30分未満のユーザーを除いた場合、視聴者数は51名となった。
- 8 大須賀・富田・今津・林は2022年度に実施した合同 IR 研修会からの知見に基づき中京学院大学の IR 室を再考した結果、これらの課題を抱えていることを指摘した（大須賀・富田・今津・林，2023，pp. 47-48）。
- 9 「各参加校のコンサルティングセッションは参考になるものでしたか。」の問いに対して「1」を「まったく参考にならなかった」、「5」を「とても参考になった」とし、1から5の数値の選択を求めた（回答数=53件）。次に参考値としてその平均値を求めたところ4.45であり、その数値は「全体的な研修会のプログラムの内容はいかがでしたか。」(4.25)、「全体的な研修会の時間配分はいかがでしたか。」(3.81)、「ミニシンポジウムはいかがでしたか。」(3.85)、「中京学院大学教学 IR 室の事例報告は参考になるものでしたか。」(4.34)、のそれぞれの平均値よりも高い結果であった。

参考文献

- 一般社団法人日本私立大学連盟大学 IR 機能促進検討プロジェクト（2018）「これまでの IR これからの IR 課題と提言」，
https://www.shidairen.or.jp/files/topics/455_ext_03_0.pdf（2023年9月17日アクセス）
- 大須賀元彦・林勇人・今津木綿子（2022）「小規模私立大学における教学マネジメントサイクルの構築に向けた教学 IR の業務上の課題」『中京学院大学紀要』第1巻第1号，pp. 13-20. 中京学院大学，
<https://chukyogakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000017>（2023年9月18日アクセス）
- 大須賀元彦・富田宏・今津木綿子・林勇人（2023）「小規模私立大学における教学マネジメントの構築に向けた合同 IR 研修会からの知見」『中京学院大学紀要』第2巻第1号，pp. 43-49. 中京学院大学，
<https://chukyogakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000012>（2023年9月17日アクセス）
- 中京学院大学「IR の取り組み」，
https://www.chukyogakuin-u.ac.jp/teacher/38_61712d096f55c/index.html（2023年9月22日アクセス）
- 中京学院大学「収容定員，在籍者数」，
<https://www.chukyogakuin-u.ac.jp/outline/date/capacity/index.html>（2023年9月22日アクセス）
- 日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター私学情報室（2023）「令和5（2023）年度私立大学・短期大学等入学志願動向」，
<https://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukouR5.pdf>（2023年9月17日アクセス）
- 文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」，
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/07021403/002/002/1340519.htm（2023年9月17日アクセス）